
防人の唄

由良川成美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

防人の唄

【Zコード】

Z5803W

【作者名】

由良川成美

【あらすじ】

ここは、我々のいる世界に似た歴史を歩み違う過去を歩んだ世界。台頭する中国の軍事力に対抗するため、日本国国防軍とアメリカ合衆国太平洋軍による軍事演習が行われようとしていた。しかし、その陰では沖縄が、否、世界が戦慄する陰謀が進行中だつた！ 国防陸軍一等軍曹神崎聰は一式人型戦車を駆り、沖縄に平和を取り戻せることができるのか！？

第一話（前書き）

誠にお待たせいたしました。
身勝手な自分の都合で皆様に「迷惑をおかけしたことを深くお詫び
申し上げると共に、本編をお楽しみいただけますようよろしくお願
いします。

第一話

神崎聰が広島県にある町に生まれたのは、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）で指導者が急逝した直後、朝鮮人民軍によるクーデタ－が勃発。

その後、実権を握った軍が暴走し、韓国に侵攻したのをきっかけに第二次朝鮮戦争が勃発した年でもあった。

聰の生まれた町は数多くの観光資源に恵まれ、観光シーズンともなると、国内だけでなく海外からも観光客が訪れごった返す、そんな町だった。

小学校に上がつてから三年前後の間、聰は父方の小田という姓を名乗っていた。

聰は父と母、そして妹の優との四人暮らしで、父は国防海軍の大尉だった。

第一次朝鮮戦争が勃発した際、日本は実働介入を宣言しながらも、朝鮮半島に陸海空三自衛隊を派兵することはせず、専ら米韓連合軍への物資援助や洋上給油にのみ参加するだけだった。

自らの手を汚すのは嫌だが、見て見ぬ振りをするのはさすがに気が引ける。という当時の日本政府の幼稚で身勝手な考えが反映された結果だった。

しかし、当時の北朝鮮は、米韓連合軍への軍事的援助を行つた日本に対し、弾道ミサイルを撃ち込み、工作員や人民軍の特殊部隊による破壊作戦を実施した。

弾道ミサイルの弾頭に搭載されていた化学兵器は、何の罪もない日本の国民を虐殺し、工作員によつて原子力発電所を破壊された東北地方では高範囲に渡つて放射能による汚染が広がつた。

多くの血が流れてようやく目を覚ました日本はその翌年に憲法を改正し、国防部を国防省へ、自衛隊を国防軍へと昇格、拡充した。

こうして日本は戦後半世紀以上を過ぎて初めて武力の保有と個別

的、集団的を問わず自衛権行使することを国内外に宣言したのであつた。

そんな中、聰の父親は、自衛隊が国防軍へ昇格したことによ伴う部隊再編に際して、陸海空の各部隊との調整役を任せられた。そのため日本全国の国防陸海空三軍の基地や駐屯地を駆けずり回つた。

左が日本は永久に軍隊を放棄し、未来永劫の世界平和を希求するのではなかつたのかと言えば、右は日本だけでなく、自國軍隊を保有し、自國の国土、国民、主権を守るのは、國家が持つ当然の権利だと言う。

そんな答えの見えきつた議論が、国会やワイドショーで喧々諤々と盛んに行われ、それが日常的にお茶の間に流されている間、聰の父親だけでなく国防軍の軍人たちは「自衛隊」としてではなく「軍隊」としての部隊運用の研究と実践に邁進していた。

多忙を極める国防軍の軍人たちが、そんな答えの見えきつた議論に付き合える暇などなかつた。

続々と導入される新兵器に新システムに、それを整備運用するための技術の習熟。

教える方も教えられる方も、何が何やら分からぬ中、多くの軍人が自分の家で待つてゐる妻や子を思つた。もちろんその中には聰の父もいた。

数多の艦艇や基地の中を駆けずり回り、たまの休みに帰つてくると、疲れた体に鞭を打ち、聰や優を連れて遊びに出かけるのが父の「任務」だった。

「この国に住んでいる人が思つてゐるほど、世界は優しいもんじゃない。他の国の政治家や大統領みたいに偉い連中の中には、自分のことしか考えていない奴がいっぱいいる。でも父さんはそれが悪いことだとは思つてない。むしろ自分の国をないがしろにするような奴が、他の国のために何か出来る訳がないんだ。でも、もし他の国が自分の利益のために、日本に攻めてきたら父さんは戦うよ。相手の兵隊さんにも同じように奥さんがいて、聰や優みたいな子供

もいるのかも知れない。でも、もう一度と戦争でこの国の人たちが死ぬのはごめんだし、何より母さんや聰や優を守るために喜んで相手の兵隊さんを殺_{やつつけてやろうと思つ}。これは父さんだけじゃない。国防軍に入った人はみんな何か大切なものを守るためだけに毎日苦しい訓練をしてるんだ」

「なんで父さんが戦わなきゃいけないの？ 父さんの他にも兵隊に行く人がいるのなら、その人たちに任せればいいのに」

まだ幼かつた聰がそう尋ねると父は言った。

「確かに人任せにすれば楽だろうな。でもそうしていると、いつかは痛い目を見ることになるからな。それはできないんだ」

「……？」

聰は思わず首をかしげた。父は一体何を言つてているのだろう？ 父のその言葉を理解するには、少年はあまりにも幼かつたのだ。父はそんな聰の頭をわしわしと撫で、自分の背中で眠りに落ちている優を起こさないようにしながら、聰の手を引き、家路に着くのだった。

そんなある日、父は死んだ。

呉にある国防海軍の基地から家に帰る途中で「赤衛隊」と名乗る左翼系の過激派テロ組織に襲撃され、集団暴行にあった。

その際、負った脳挫傷が致命傷となり、病院へ搬送されたが、手の施しようがなかつたとのことだった。

戦後半世紀を過ぎた今日までの間に自衛隊は、二件のクーデター事件を引き起こしていた。

そのため自称革命主義者による自衛隊並びにその後進に当たる国防軍の関係者に対する暴力事件や殺人事件が、日常的に起つていた。

そしてその頻度は憲法改正前後から右肩上がりで増加していった。父が標的となつたのに深い味はなかつた。

政府の犬と化し、日本だけでなくアジア諸国の国民を弾圧し、それを正義と公言するその厚顔無恥さに憤りを覚えた そんな幼稚な

論理を書き連ねた犯行声明が、吳鎮守府の総監部に送りつけられたそうだ。

聰は納得がいかなかつた。自分のためだけではなく、国民のためには毎日、身を挺していた父が、どうして国民を弾圧していたのだ。仮に国防軍が国民を弾圧し虐げているというのなら、中将や大将といった高級将校か、幕僚総監のような要職者の首を獲つた方がよほど効果的だろう。

しかし奴らが狙うのは、常に屈強な護衛のつく高官クラスではなく、兵卒や下士官、士官であつても重要な要職に就いているとは言い難い者ばかりだった。

早い話、奴らは自分の醜い暴力衝動を「国民を救う」という崇高なオブリークトに包み、適当に発散しているだけなのだ。

だいたい連中の言つアジア諸国とはどこの国のことなんだ。

聰は激しい憤りを感じたのだった。

病院から父の遺体を取り取り、葬儀の手続きをするまでの間、と大人たちは「子供にはとても見せられるものではない」と聰と優に父の死に顔を見せることはなかつた。

聰はそんな大人たちの目を盗み、父の棺の中を見た。見せられるものではないも何も、息子である自分が、父の死に顔を見るることはできないと言うのは道理が通らないと思つたからだ。

聰は棺に収まつた父と、父だつた「物」と対面した。

頭は歪な形に変形していく所々が縫合されていた。昔、と言つてもほんの三か月前に見た映画「フランケンシュタイン」に出てくる怪物のようだつた。

優しく力強かつた父の面影など、微塵にも感じられなかつた否、聰は何も感じられなかつた。聰は土氣色に変色した父の冷たい肌に触れると、聰の目から初めて涙がこぼれた。

親戚にその現場を見咎められ、隣の部屋に連れて行かれるまで聰は、一度とぬくもりが戻ることの無い父の肌に自分の涙が落ちる音を聞いていた。

それから一年前後のこととは、特に語る必要もないだろうが、強いて言つならば、母は夫である父に代わつて二人の子供を養うために、県内にある出版社に勤め始めた。

優は以前の明るさが嘘のように口数の少ない暗い少女になってしまった。

聰はというと、父の生前と同じように学校へ行き、食事を取り、宿題をした。

変わつたところと言えば、家計の負担を減らすために幼稚園の年長から通い続けていた空手の道場を辞めたことぐらいだ。

不思議だった。父が死んだ当初は家族みんなであれだけ泣き喚いたのに、今では涙が一滴も出なくなつていた。

悲しみの大きさは一ミリたりとも小さくなつていなければ、はずなのに、だ。月並みだが、まるで心に穴が開いてしまつたようだつた。

そんなある日、何気なく点けたテレビが「赤衛隊」のメンバー、つまり父を殺した犯人たちが別件で逮捕されたことを伝えていた。何でも東京の地下鉄で大規模なテロを行おうとしていたらしい。

テレビのアナウンサーによると、「赤衛隊」は過去に何度も破壊活動を繰り返しており、軍民を含させて数百人もの犠牲者を出していたらしい。

マスコミは口を揃えて死刑は確定だと報じていた。

犯人たち一人残らず送検され法廷に引きずり出されたことを知ると、父も完全にとはいかないだろうが報われるだろうし、自分たちと同じように大切な人を奪われた人たちも多少なりとも溜飲を下げることができるだろうと聰は思つていた。

どんな極悪人共でも有罪か無罪かを推し量らなければ、一二階段に送ることができない日本の法律に聰は疑問を感じたが、とにかく裁判が始まつた。

裁判の最初のころは、世間を騒がせた集団であることも相まって、マスコミが報道合戦を開いていたので、傍聴券の倍率は数十倍に

膨れ上がってしまった。

母はもう少し、事件のほどぼりが冷めてから行こうと言つた。

マスコミの取材に応じれば、傍聴券をもらうこともできたのだが、母は自分の子供たちが見世物になるのを拒んだ。

しばらくした後、聴たちは法廷へ足を運んだ。

犯人たちは法廷で口をそろえて、自分は悪くない、悪いのは国家のほうだと無茶苦茶な論理を吐き散らし、弁護団は犯人たち全員が幼少の頃に育つた環境のせいで心神喪失となつてるので刑事責任はないという、子供だった聴でも無理のある弁護を展開していた。聴には犯人たちの言う「革命」だとか「共産主義」という小難しい言葉はよくわからなかつた。

それでも犯人たちが本当に国家や国民のために行動を起こしたのではないのは分かつた。

国家が国民を弾圧することに義憤を感じ、その国家を打倒し国民を救いだし平和な社会を実現したいというのなら、政府の要人を殺せばいいだけの話で、何の罪もない国民や、公に尽くす軍人を殺していい理由になるわけがない。裁判所もそれは分かりきつているだろう。

数年に及んだ裁判は、そんな聴たち遺族の考えを打ち碎いた。

裁判所は主犯一名には懲役一〇年、他の実行犯のうち三名は懲役一五年、残りの四名は懲役一〇年の執行猶予三年を言い渡した。誰一人として極刑になつた者はいなかつた。

奴らに刑事責任能力が無いといつ弁護側の主張が、認められた結果だつた。

奴らは多くの罪のない人々を、あまつさえ自分たちを守るためにその身を捧げていた軍人や警官を、無慈悲に殺傷しながら、これらも刑務所の中でのうと生き続けていくのだ。

そしておそらく奴らの中には何年かすれば模範囚として出所し、自由を謳歌する肩のような奴もいるはずだつた。

そして、傍聴席のあちこちで泣き声や犯人たちに向けられた罵声

がこだまする中、聰はそれをはつきりと見た。

「赤衛隊」の犯人たちと弁護団が何事かを話している最中、裁判で

主犯格とされた女の顔が笑みの形に歪んでいたのを。

言葉は悪いが、感情的になつて喚き立てていた他の遺族と比べて、あまりの事態に茫然としていた聰だったからこそ、その主犯の女の笑みを見ることができたのだろう。

その笑みの意味は聰にはわからなかつた。

自分のお涙頂戴の演技が功を奏し減刑されたことに対して、安堵した笑みだったのかもしれない。

それとも自分たちが引き起こした事件の被害者やその遺族を、嘲る笑みだったのかもしれない。

しかし聰にとって、笑みの意味などは問題ではなかつた。

その女が笑つたこと自体が許せなかつた。自分のしたことについて悔恨もなく、笑つたことが許せなかつたのだ。

聰は思つた。あれは悪だ、人の皮をかぶつた悪だ。だが、日本の司法はそんな悪の権化を守つたのだ。

あの犯人たちを許せない。

そして冷酷無慈悲な悪党を守り、弱者を虐げた法に対しても怒りを感じた。許せず、そして許せず、やはり許せなかつた。

そして聰は誓つた。あんな悪党が一度と無辜の人々を傷つけることが無いよう戦うことを。

その日、一人の少年が「兵士」に生まれ変わった瞬間だった。

第一話（後書き）

今後ともよろしくお願いします。

第一話（前書き）

遅筆で申し訳あつません。とにかく続きです。

第一話

七月上旬 一一〇〇時（午後一〇時） 場所不明
機械油の充満する密閉式の搭乗席の上で、その男は噴き出すように流れる汗をぬぐおうともせず、正面モニターとにらめっこをしていた。

そのせいで男の顔はモニター やディスプレイに照らされ、何とも不気味な様相を呈している。

男は在日米軍の歩行戦車部隊に属する先任曹長だ。

曹長が搭乗する歩行戦車は、往来の戦車にそのまま脚をくつつけた形式で、最先端技術の粋を集めて作られた人型と較べると、何とも不格好な兵器だった。

しかし曹長はこの武骨者を気に入っていた。

WT 18。この歩行戦車の名称だった。

車体と砲塔を合わせて全長九メートルの巨体に、計六脚の脚が三対に伸びている形状だった。

固定武装は一〇〇ミリの口径を持つAY-13レールガンが一門とTOW対戦車ミサイルが計八発、そして三〇ミリ機関銃が一門だった。

曹長を隊長として計4輌のWT 18が山間部でアンブッシュ（待ち伏せ）をしていた。

車体にはデジタル迷彩の塗装を施し、草木や小枝を張りつけた赤外線を通さないカバーを羽織っている。

完璧な偽装だった。ここまで完璧に偽装を施せばFIREはおろかIRSTを装備した航空機でさえ、自分たちを発見することは難しいだろう。

後はいずれここを通るであろう敵を自慢のレールガンの一斉掃射で消し飛ばしてやればいい。

敵が装備する人型戦車のスタイリッシュなフォルムがレールガン

で粉碎されていく様を想像すると、曹長は思わず舌なめずりをした。

陸戦の主役が人型だと？　ふざけるな。陸戦兵器に必要なのは強靭な装甲と全てを蹂躪する重火力だ。

それに対しても人型ときたらペラペラの紙装甲に、必要最低限の火力しか有していない。

二脚步行による機動性と、様々な任務に応じて柔軟に兵装を変更できる点では人型が優れていることは認める。

だがあくまで、「優秀」な兵器であっても「万能」というわけではない。それをペンタゴン（アメリカ合衆国国防総省）のお偉いさんに思い知らせてやる。

そう思うと曹長は、トリガースイッチのついた操縦桿を持ちぶたさに握りしめた。

その時、闇の向こうに人型の特徴的なシルエットを索敵カメラが捉えた。

来た！　曹長は、はやる気持ちを抑えながら一〇〇ミリレールガンの照準を敵に合わせる。それに倣うように、他の三輪も照準を合わせる。

敵の数はこちらと同じ四輪だったのだが、仲間とはぐれたのだろう。目の前に現れたのはたった一輪だった。

悪く思うなよ。これが「戦争」だ。そう思いながら曹長はトリガーに指を掛けた。

一〇〇ミリの口径を持つ砲身に内蔵される、電位差のある一本の電気伝導体から成るレールに挟まれた電流を通す弾体が、レールとの磁場の相互作用により加速する。

砲身から飛び出した弾体はその刹那、音速の七倍を超え、大気を切り裂く　前に敵の人型は照準線から消えていた。

馬鹿な！　どこに消えた！？　曹長はナイトビジョンによつて濃緑色に染まつた外界の風景が広がるモニターを食い入るように睨んだ。

次の瞬間。部下のWT-18が突如、爆発、炎上、擱座した。

まさかばれていたのか？　ここに陣取り敵を待ち伏せていたことや発射のタイミングも相手に筒抜けだったと言うのか？

無線を封鎖しナイトビジョンはもちろんFLIRやIRSTのような赤外線カメラにも探知できぬよう完璧な偽装を施していたのに？

曹長が唖然としていると他の部下も交戦状態に突入したらしく、レールガンの咆哮と大気を切り裂く閃光が闇夜を照らす。

「機動力では向こうが上だ。十分距離をとつて重火器で応戦しろ。白兵戦に巻き込まれるようなドジは踏むなよ」

「イエス、サー！」

曹長は敵の兵装などの情報が映し出されたディスプレイを見ながら部下に指示を送る。

ちなみにこのディスプレイに表示された情報は曹長の部下にも映し出されている。部隊内で得た情報を部隊内で共有しているからだ。

敵はタイプ1-1の大型戦車。兵装は二五ミリ口径のアサルトライフルと近接戦闘ブレード。それに両肩にはCKEM（小型運動エネルギーミサイル）のランチャーが装備されていた。

レールガンは無反動で超音速の弾体を投射する代償に、ハンパではない電気を使用する。

大型のバッテリーと発電機が必要だった。そのため米軍のWT-18のような大型車両でなければ運用できない。

それに較べCKEMのような小型の高性能ミサイルは、大がかりな発電機構を搭載しなくとも装備できるので、積載量が小さい戦闘車両は少ない火力を補うためによく装備した。

しかしミサイルとランチャー（発射器）の単価は他の兵器と較べてべらぼうに高かった。レールガンにせよCKEMにせよ一長一短といったところだった。

「クソ！　何なんだよ！？　何で当たらんんだよ！？」

「　ツ。こちらビンゴ3！　脚部に被弾！」

「砲身充電……早くしろ！　早！」

インカムのレシーバーから響く部下の悲鳴に曹長は檄を飛ばす。

「うるたえるな！ 火力ではこちらが上だ。引き続き距離を取つて応射を続ける。CKEMに対してもチャフを使え！」

彼らの乗るWT-18にはECM（電子対抗手段装置）が搭載されていたが、相手のタイプ11のCKEMにはそれは通用しない。もしECMで対電子機器電磁波を拡散すると、タイプ11のミサイルは電磁波の発生源に向かつて誘導される仕組みなつているのだ。とにかく形勢を立て直さねば。とりあえず後方五キロのポイントに そこで曹長の思考は停止した。目の前に敵のタイプ11がいたからだ。

だがタイプ11は 相手が言う所の一式人型戦車は曹長のWT-18にCKEMをぶち込むどころか、アサルトライフルを向くようともしなかった。

そんな敵の態度が曹長のプライドを傷つけた。

「舐めるなあ……」

曹長は抱えるとレールガンを散弾モードに切り替えてタイプ11にトリガーを引いた。

しかし田の前のタイプ11はトリガーを引く前に射線上から身を翻し、極音速で飛来する散弾を難なくフットサルの選手のような機敏な動きでかわし、一気に曹長の懷に飛び込んでくる。

まことに！ 曹長はとっさにフットペダルを踏みつけながら操縦桿とギアを巧みに操る。そしてタイプ11との距離をとつて二〇〇ミリ機関銃とTOW対戦車ミサイルを撃ち込んだ。

が、当たらない。

敵は曹長がトリガーを引く前にやはり射線から消え、撃ち放し機能を搭載したTOWはアサルトライフルでシューティングゲームのように撃墜していった。

戦車の性能だけではない。戦車兵のスペックそのものが上だ！ そう思ふと曹長は部下に撤退し態勢を整えるようインカムのマイクに吹き込もうとして 悄然とした。

自分と味方と敵の位置を把握するディスプレイには、味方を示す

緑色の輝点が消え、代わりに敵を示す赤い輝点が曹長の周りを取り囲んでいたからだ。

こうなつたら、目の前のこいつだけでも！ そう思ふと曹長はレールガンをぶつ放しながら、アクセル全開でタイプ11に突っ込む。

「轢き殺してやるぞ！ ブリキ人形！！」

だがタイプ11は、曹長の突貫を跳躍でかわす。

そして曹長の乗るWT-18の砲塔に飛び乗りざまに電磁ナイフを搭乗席のあたりに突き立てた。

その瞬間、曹長の目の前は真っ暗になつた。

しばらくすると、再び搭乗席の照明が点灯した。先ほどまで鬱蒼とした森林を映し出していた目の前の正面モニターは、倉庫のような建物の中を映していた。

曹長は搭乗席から降りると、格納庫の床に思いつきヘルメットを叩きつけようとしたが、これにはHMD（頭部装着ディスプレイ）を始め、様々な精密機器を搭載していることを思い出し、止めておいた。

ふと隣を見ると、部下が情けない顔をこぢらに向けていた。

「隊長。その……すいませんでした」

「……これが実戦なら謝るだけではすまんぞ」

曹長は部下の肩に手をかけながらそう言った。

今まで曹長たちは戦闘を行つてゐるかのように見えたが、実際にはVR（仮想現実）技術を用いたVR訓練だったのだ。

ほどなくして向こうから敵が 国防陸軍の兵士たちがこぢらにやつてきた。

「今日は有難うございました」

一人の小柄な国防陸軍の兵士はそう言つて、曹長に握手を求めてきたので曹長はそれに応じた。

そして曹長はその兵士に訪ねた。

「最初の攻撃のとき、なぜ我々の位置がわかつたんだ？」

「音ですよ」

「音?」

「はい。うちの一式には高性能集音センサーが搭載されていて…人の可聴域外の音を捉えて敵の位置を把握できるんです」

「そうだったのか……そうすると我々がレールガンで掃射しようとしましたことも……」

「はい。データさえ揃えていれば、集音センサーで捉えた音からその車両の種類や、その車両がどのような行動をとるのか把握できます」

なるほど。いくら偽装したとしても音までは撃き消すことはできないからな。曹長は納得した。

しかしそれだけではない。今回戦つた人型のハードとソフトの技術は確かに凄い。だがそれも優秀な戦車兵が操るからこそ最大限にその性能を発揮できるのだ。

悔しいが自分たちより彼らのほうが戦車兵として優秀であることは、今回の「戦闘」で曹長は嫌というほど思い知らされた。

「もう一つ、演習の最後に私を倒したのは誰なんだ?」

自分を「戦死」に追い込んだ相手は見事なものだったなと思つた曹長は、目の前の国防陸軍の戦車兵たちに誰ともなくそう尋ねた。

「私です」

先ほどの小柄な国防陸軍の戦車兵が名乗り出た。

「お前が?」

「はい」

その小柄な戦車兵が答えると、曹長は彼をまじまじと見ながらまた質問した。

「どうやつたらあんな動きができるんだ? それこそ生き物みたいな動き方だった」

「それは……」

「たのむ。教えてくれ。今後の訓練や戦闘の時に役立てたいんだ」

その少年のような 否、少女のようなといつても通じる風貌を

した兵士は、曹長のその質問に少し考え込んでいたようだったが、やがて口を開いた。

「それは、とにかく練習したからです」

「……」

曹長以下、在日米軍の戦車兵たちはその言葉に狐につままれたような顔をした。

「では我々はこれで。今口はありがとうございました」
しばし呆けていた曹長だつたが、そう言って小柄な戦車兵が立ち去ろうとするのを慌てて引き止めた。

最後に、最後に聞きたいことがあつたからだ。

「君の、君の名前を教えてくれないか？ 軍曹？」

それに小柄な戦車兵はその童顔を引き締め、曹長に敬礼しながら答えた。

「日本国国防陸軍富士教導旅団戦車教導大隊第一中隊隸属の神崎聰
軍曹です」

第一話（後書き）

あつがとひらがなこめす。 いれからもがんばります。

もし悪夢を食らうと、一つ漠なる生き物がいるとするなら、その夢は大いに食い応えがあつたに違いない。

目の前を歩く父に追い縋ろうと必死に駆け寄る少年。だがその歩調とは大きくかけ離れたスピードで父は少年を引き離していく。待つて、待つてください。もしあなたがどこかに行ってしまったら、残されたあなたの妻と幼い息子と娘はどう生きていけばいいのですか。

あなたの帰りを楽しみに待つていた家族を、あなたは見捨てるというのですか。

そんな少年の思いが通じたのだろう。

父はやつと歩みを止めてくれた。少年は父の背中に縋つた。が、何かおかしい。

原因すぐ分かつた背中は冷たく硬かつた。ハッと見上げると夏服の第一種礼装の軍服は白い死装束に変わっていた。

呆然とする少年に父は振り向いた。その顔はひどく歪み、金属のプレートで所々が縫い合わされていた。

さりにその顔がぐちゃぐちゃに歪むと女の顔のそれに変わった父を殺したあの女の顔だった。そしてそれは満面の笑みを浮かべながら、いきなり少年に飛びかかってきた。

薄暗く蒸し暑い場所で、その聰は目を見ました。

聰は国防陸軍の軍曹を示す階級章が付いた迷彩色の戦闘服を着こみ、大汗をかきながら、何かしらの搭乗席に着座していた。

聰は仕事の途中に寝てしまっていたことに気づき、慌てて手元のタッチキーを操作し始めた。

一一式人型戦車の頭脳部分に搭載されている学習型OSが昨日の演習で学習した内容から、覚えさせるべきものだけを取捨選択する

ためだつた。

聰はふと、自分の目から涙がこぼれていたのに気づいた。
ずいぶん昔の夢を見ていたせいだな。そう思いながら聰はその涙
を拭うと、再びキーを叩き始めた。

ファイヤーコントロールシステム（火器管制機構）、射撃姿勢自動制御、戦闘状況認識倫理演算システムの状況を表示するディスプレイの明かりが薄暗い搭乗席を照らす。

やがて「学習を終了する」と、頭にかぶつたヘッドセシットのマイクに吹き込むと、「了解。お疲れ様でした。神崎軍曹。所要時間は三時間でした」と一式に搭載されたコンピューターが骨伝導の機械音声で伝えてきた。

聰はその狭い搭乗席から這い出すよつに外へ出た。外に出ると、そこは一式を始めとする何台もの軍用車両が駐車している格納庫だつた。聰が格納庫の床に降りると、顔なじみの整備士が「寝てたんスか？」と、いたずらっぽい笑みをこちらに向けていた。

聰は「うむせえよ」と言いながら、その整備士の頭を軽く小突いた。

真夏であつたのも関わらず、涼しく感じられたのはサウナ状態の一式の搭乗席で、昼寝をしていたからに違ひなかつた。聰は、うん。といった感で背伸びをし、それから真夏の気温に晒され、すっかり温かくなつたスポーツ飲料を一気飲みした。

神崎は格納庫にある日陰に腰を下ろすと、先ほどの夢の内容を思い出していた。本当にあれから十年以上も経つたのかと感慨深いものもあつた。

あの、不当な裁判が終わつた直後から聰は知力と体力を磨くことに精進し、中学を卒業後、国防陸軍少年戦車兵学校に入隊した。

少年戦車兵学校は戦車だけでなく、日本の国防軍が装備するあらゆる軍用車両を整備、運用するためのスキルを身に付けた下士官を三年という短期間で養成する、国防陸軍教導旅団戦車教導連隊隸下の教育機関だつた。

初め、聰は自分の父と同じ国防海軍に入隊しようと思つたが、県内にあつた国防軍地方連絡本部の職員、俗に言う「地連のおやじ」は海も空も定員を軽くオーバーしているので、入るのは難しいと言つた。そこで、聰に少年戦車兵学校へ行くのを勧めたのだ。

聰も特に軍種にこだわろうとは思わなかつたので、一つ返事でそれを了承した。

倍率が三〇倍にも及ぶ戦車兵学校の入学試験を聰は苦学の末に合格し、それから三年間の間、座学と実践に励んだ。

教官が黒板に書いた複雑な車両の構造や整備の仕方を、ただひたすら板書する座学の時間は聰にとっては苦痛でしかなかつた。

しかし、それも実技実習の時間になると一変した。空手の道場に通つていた頃から、自分でも薄々と感づいてはいたが、聰は頭でより体の方で覚える才覚に恵まれていたかつたらしく、車両に限らず兵器の整備の仕方も運用も、要は体で覚えればいいだけの話だつた。その後、聰は少年戦車兵学校を創立以来のトップクラスの成績で卒業すると、そのまま富士教導旅団戦車教導連隊に隸属となつた。

卒業の際、聰にあてがわれたのは、「鋼鉄の巨人」一三式人型戦車だつた。

全高六メートル強、乾燥重量六トン、全備重量一一トンの巨人は、旧ソ連との地対地戦において圧倒的機動力と重火力で、戦闘を優位に進めるために開発された九〇式が前身だつた。しかし当方の敵だつたソ連が崩壊し、この巨人の存在意義が危ぶまれた。

しかし、その後の研究の積み重ねで「市街地における対ゲリコマ戦」において優秀な性能を發揮することが分かり、量産停止の憂き目を逃れることができた。

そんな何とも複雑な経緯を辿つた兵器だつたが、それでもコイツが優秀な兵器であることは、幾度となく共に演習に参加した者なら容易に分かつことだろう。もちろん聰もその中の一人だつた。

先ほどまで整備班長の怒鳴り声などで騒がしかつた格納庫が急に静かになつた。

聰は何気なく格納庫の出入口を見て、慌てて飛び上がるよう立ち上がり敬礼した。

国防陸軍少将の肩章をつけた軍人が入ってきたのだ。
その少将はしばらく格納庫の中を見渡していたが、やがて聰の方へ近づいてきた。

「神崎軍曹だな？」

「はい」

少将が尋ねて來たので聰は答えた。

「私は佐竹幹弘少将だ。いや、昨日の演習は見事なものだった。
正面火力で勝る相手を機動力で圧倒する。正に人型の長所を最大限に引き出したからこそと言えるだろう」

「……大変恐縮ですが、それほど褒められるようなことはしていません。演習で勝てたのは部下や整備班の人たちおかげですし。それに私自身が撃破したのは一機だけで」

「下手な謙遜はいい。褒めてやっているのだから素直に喜びたまえ」
佐竹は聰の言葉を遮った。心なしか不機嫌になつているようだ。
「申し訳ありません。言葉が過ぎました。身に余るお褒めの言葉、
大変恐縮です」

佐竹から滲み出た不穏なオーラを敏感に感じ取った聰は、とりあえず謝罪ついでに礼を言つ。

そんな聰にまだ不服そうな佐竹だが、とりあえずは話を続けた。
「早速、本題に入りたいところだが、ここでは何だから司令部に行くぞ」

「はい」と聰は返すと、踵を返して司令部に赴く佐竹の後を聰は追つた。

クーラーのきいた応接室に入ると、佐竹は部屋のテーブルの椅子に腰かけるよう促してきたので、聰はそれに従つた。
佐竹もどつかりと椅子に座ると早速、聰に聞く。

「単刀直入に聞く。『海兵旅団』に来ないか?」

佐竹の唐突なその問いに聰が戸惑つた。海兵旅団という名を持つ部隊は国防軍はないし、第一、聞いたことも無かつた。

海兵旅団とは何ぞやと聰が聞き返すと、佐竹は「日本における国防の要と成りうる存在」と答えた。

現在の国防陸軍の編成は、旧陸自の旧ソ連との地上における大規模な戦闘を想定した編成のままだつた。

まず旧ソ連といった仮想敵国が、大規模な陸上戦力でもつて日本本土に侵略を開始。

その際、国防陸軍は国防海軍と国防空軍の支援を受けつつ、強大な火力でもつて敵を釘つけにする。

その後、在日米軍を始めとする同盟国軍が加勢に加わり、敵を撃退する。これが長年、国防陸軍が旧陸自時代から抱いてきた国防のセオリーだつた。

しかし最大の仮想敵国である旧ソ連が崩壊して早三〇年以上もの月日が経ち、日本を取り巻く情勢も一変した昨今において、今の国防陸軍の重装重火力編成では突発的なテロや災害を始めとする突発事象に対応することは難しい。

第二次朝鮮戦争後、憲法改正と再軍備に日本が舵を切つた事を区切りに、国防省も国防陸軍の抱えるこの問題を解決すべく「機動師団構想」を打ち上げたのだが、それでもまだ不十分だと佐竹は聰に熱く語る。

佐竹を旅団司令に置き、国防三軍の指揮系統から独立した総理大臣、もしくは国防大臣の直轄部隊として独自の権限と、独自の海上及び航空移動手段で迅速に日本の東西南北にどこにでも展開する精銳戦闘集団。これが海兵旅団の全容だつた。

「……そんな、精銳部隊に俺が、いえ、自分が?」

あまりのスケールの大きさに、聰は改めて戸惑いを覚えた。

「それほどの精銳部隊なら、俺の他にも優秀な戦車兵はいくらでもいますし……それに俺は去年、少戦校（少年戦車兵学校）を卒業し

たばかりのひよっ子で　」

「先ほども言つたと思うが、下手な謙遜は相手の機嫌を損ねるだけだぞ」

また聰は佐竹に言葉を遮られてしまった。

「私は実力至上主義でな。その私が君の実力を見込んで誘つているのだ。素直に喜んだらどうだ」

そう言つと佐竹はPDAを取りだすと手慣れた感じで操作し始めた。

「神崎聰、201X年に国防陸軍少年戦車兵学校に入学。在学中の座学における成績は中の上。しかし実技演習においては在学期間の三年間、トップクラスの成績を収め続け卒業。そして卒業してすぐにレンジャー訓練生として国防陸軍松本駐屯地第一三歩兵連隊に出向。三ヶ月後に見事レンジャー資格を……やはりすごいな」

PDAに表示された聰の経験を眺めながら佐竹は独り言づいた。

「ありがとうございます」

聰は今度こそ素直に礼を言つた。

「神崎軍曹、最後にもう一度聞く。うちにこないか？」

聰はしばらく考えたが、すぐに答えは導かれた。

自分の願望、母にも妹の優にも教えなかつた願望を成就させる手段としては、海兵旅団に入ることは悪くはない、むしろ最高の選択だと聰は思つた。

聰の願望。それは世にはびこる不当な暴力に対して、自らが抑止力となり、必要とあらば暴力で持つて制裁を敢行することだった。

聰は佐竹に手を差し出した。

「なんだ？ 残念だが私は易者ではないぞ？」

聰は首を少し振ると言つた。

「これから、お世話になります」

佐竹はふつと笑つと、差しのべられた聰の手を力強く握つた。

「残念だが、君を『お世話』するほど『うち』はぬるくはないぞ？」

微笑みながら言つ佐竹に聴もまた、力強く返す。
「望むところです」

その組織が、冷戦の過熱期に創設されて以降、共産圏の諜報機関から日本の国益を守ってきた事実は、国防軍の高級将校か政治家、それも一部の人間にしか知られていない。

その組織の名は「国防情報庁」。

旧防衛庁自衛隊時代から非公式の外局「防衛調査庁」として、日本での防衛に関する情報の奪取と保護を担い、日本の舞台裏で暗躍してきた日本独自の諜報機関だ。

また、日本の国益に反する組織や人物を「事故死」や「病死」または「自殺」させることも、国防情報庁の任務だった。

しかし、ソビエトの崩壊とそれによる共産圏の弱体化、冷戦の終結により防調（国防情報庁）の存在意義は薄れ始めた。

政治家や官僚は税金の無駄遣いであり、存在が公となれば世論から、激しいバッティングが自分たちに向かうかもしれない防調の存在を疎んじ始めた。

また、日本の治安を担うのは自分たちだと謳う警察の高級官僚は防調の解体の好機を虎視眈々と狙っていた。

それを証明するかのように、防調の予算と人員は軒並み削減されていき、一時期は予算は最盛期の三分の一、さらに人員も半数近くが削られていった。

そんな事態を開拓する出来事が起きた。一九九五年の第一次朝鮮戦争である。

朝鮮半島の戦火が日本に降りかかった際、戦争や災害などの非常事態において、一番重要なのは「情報」であることを、多くの政治家や官僚は思い知った。

いくら優秀な弾道ミサイル迎撃システムを導入しようと、北朝鮮と日本のようにごく短い距離間で弾道ミサイルが発射された場合、対処にあてる事のできる時間は、ごく短時間である。そのため、

発射されてから「ではなく「発射される前から」事前情報を収集し対処しなければ間に合わない。

しかし日本はそういう情報収集する力を自らの手で弱めのだ。さらに事態は弾道ミサイルの着弾だけでは收まらなかつた。

朝鮮人民軍の特殊部隊や、北朝鮮の諜報機関である偵察局の工作員が上陸し、首都圏や各主要都市でテロ活動を行つた。

重装備でテロ活動を行う北朝鮮の特殊部隊や工作員に対して、警察に支給されるのは小口径の拳銃と警棒、ジュラルミンの盾といった有様で、とても事態を收拾するのは不可能に近かつた。

最後の砦である自衛隊も数多くの法的規制に縛られ、まともに治安作戦を実施することができない有様だつた。

そして事態は最悪な展開を見せる。

北朝鮮の工作員の一部が日本国内の原子力発電所を強襲したのだ。しかし当時の日本政府も無策ばかりではなかつた。

第一次朝鮮戦争勃発直後、原子力発電所の中核である原子炉が收まる原子力建屋に、武装した自衛隊員と警察官の混成部隊を、超法規措置として配置していたのだ。

しかし政府の予想はあまりにも甘かつた。

工作員は原子力建屋ではなく、原子炉を冷却するシステムの、動力である外部電源を供給する施設に攻撃を敢行したのだ。

結果、原子炉内の温度を一定に保ち続けることができなくなり、原子炉内の燃料棒が溶解する事態を招き、結果として高レベル放射性物質を大量にばらまくという結果となつてしまつた。

歴史に「もし」は無意味だ。しかし、日本がもし諜報能力を減退させることなく、第二次朝鮮戦争を迎えていれば、おそらくは被害を最小限に食い止めていたことだろう。

無論、警察の貧弱な武装や自衛隊を縛り付けていた法規制、日本国民の安全保障に対する無関心など、事態をここまで悪化させた原因が他にもあつたのも、また事実ではあるが。

いざれにせよ、第二次朝鮮戦争が防調を始めとする諜報機関や自

国軍の創立の必要性を国民や政治家、官僚に思い知らせたのは、まぎれもない事実だった。

第一次朝鮮戦争以降、減少気味だった防諭や自衛隊に関連する予算が軒並み増大していったのを見るとそれが如実に分かつてくる。だが、それも長くは続かなかつた。戦後の処理に行き詰まり、国内外の経済が衰退していくにつれて、国民の関心は安全保障から、自らの生活に向けられていくようになり、政治家もそれと歩みを合わせるように、安全保障重視の政策から経済最優先の政策へと方針をシフトしていった。

「防人たち」は國に翻弄されながら、一体どこへ行くのだろうか。

七月上旬 埼玉県朝霞市

明朝の時間、そのマンションのそばを走る道路の脇に、一台のワゴン車が停まっていた。

車の中には数人の男が乗り込んでいた。その中の一人はマンションの一室をビデオ撮影していた。男の名前は228という。もちろん男にはきちんとした姓と名があつたし、家族や友人は男を名前で呼んだ。だが「職場」では誰もが男を228と呼んだ。この男だけではない。現に今、男と同じワゴン車に乗り込んでいる別の男たちもまた番号で呼ばれていたし、呼び合っていた。

「職場における人権」とやら呼ばれるこのご時世に、本当の名前ではなく番号で呼び合わされていることが世間様に知られれば、一般企業なら間違いない、労働基準監督署かマスコミの餌食となるのだろうが、この男たちの職場 国防情報庁は、そうはならなかつた。どだい、非公式の存在である防諭が、世間の目にさらされるということは、まずあり得なかつただろう。

また、防諭に努めている職員のほとんどが、番号で呼ばれることに何の不満も疑問も持つていなかつた。

確かに新米の頃は、一般社会とは明らかに乖離したこの風習に戸惑

い、疑問を感じる。だが、人間というのは、どんな環境にもある程度なら適応するようにならされている。

しばりくすると役職や階級のそれのように、平氣で番号で呼び合つようになつてしまつのだ。

それよりも、「國益を守る」という目的で与えられる「任務」に伴う理不尽や不合理、やるせなさ、苦痛の方が、防調に努める職員たちの不満だつた。

今、従事している「任務」はその理不尽や、不合理の典型だな。と、男は 228は思つた。

228たちに与えられた任務としては「日本の防衛に關わる重要な任務」だつた。

警察の人手不足から警察庁の要請で、巷のチンピラやヤクザの違法薬剤輸入の阻止という、明らかに本業ではない任務に就いていた 228たちは、諸手を挙げて喜んだものだつた。

別に警察に要請されたからといって、防調が人手をよこす義理は微塵も無いのだが、「打倒市ヶ谷」を掲げるサツチョウ（警察庁）、高級官僚の「機嫌を損ねると厄介だ」ということで、泣く泣く、決して多くない人員を警察に出向させたのだ。

警察との合同捜査で、市ヶ谷（主に國防省や國防軍、防調のよう）に防衛に携わる機關を、総じてこう呼ぶことがある）にたつぱり偏見を持つ女性管理官のパワハラまがいの仕打ちを受け。

それに同情するふりをしながら、心のうちではいい氣味だと嗤つている態度が見え透いた自分より一回り年下の警察官を見ていると、自分たちの雇用者と警察上層部との馴れ合いの中で生じた不利益を、自分たちが被つているとしか 228は思えなかつた。

そんな警察からの嘲笑と侮蔑を一身に受け止めてきた 228たちにとつて、「防衛に關わる重要な任務」に従事出来ることが、どれほど嬉しいことだったかは言ひまでもない。

だが、そんな 228たちに与えられた任務というものは「あるマンショソの住人を四六時中、三六五日監視しろ」というものだつた。

監視対象1003。名前は四方光輝。出生日は西暦一九八七年三月八日。出生地は新潟県魚沼市。県内の高校を卒業後、早稲田大学の情報系の学部に進学するも二回生時に中退。

その後、自身で資金を集め、コンピューター・セキュリティ企業を二三歳で創業。以降、大手企業がITセキュリティやコンピューターセキュリティの導入する際、アドバイスや実際にセキュリティソフトを開発することを生業としていた。

また防衛産業のセキュリティにも大きく関わっていることも分かった。

228は近くの税務署から「かなり非合法な形で」四方の年収を手に入れると、一日中パソコンをいじるだけでこんなに儲かるものなのかと驚いたものだった。

何故、この男を監視することになったのかというと、一か月以上もの間、行方知れずになつたからだそうだった。

幸い、四方はマンションの自室にひょっこり戻ってきて、いつも通りパソコンをいじりまわしていた。

しかし、防調としては第三国からのサイバー攻撃への対処が、国際レベルで急務となつていて、日本のコンピューター・セキュリティに大きく関わる人物の行方が簡単に分からなくなるのは具合が悪い。

そんな訳で228を始めとする十数名の防調職員らに、監視班を編成し、一四時間体制で四方を監視するよう命じたというわけだ。

これが昨年の八月のことである。それからというもの、228たちは今に至るまで、約九か月もの間、彼を監視し続けていたのだ。

228は、否、228たちは心底うんざりしていた。

なにせ、四六時中、むさ苦しい男を監視し続けるという仕事がどれほど精神衛生上良いわけがない。幸い、228たちの他にも監視班が編成されているので、ある程度のローテーションを組むことができた。

それでも人手不足のため、土日、祝日、祭日を返上しなければならなかつたのは言うまでもない。

それに228たちは、実際のところ監視対象が 四方が何をしているのかほとんど把握できていなかつた。

大手企業のセキュリティや情報システムの構築に関する、アドバイスやソフトの開発などをやつているのは、分かつてはいるが、四方は顧客である企業との間の通信を全て、公開鍵暗号、それも解読が事実上不可能とされるRSA暗号を用いたVPNで行つていた。

しかも顧客の情報や、発注に対するワクチンソフトの開発や情報システムの設計は全て、スタンダードアローン化したパソコンで行つていたので、何をどのように作つているのか分かるはずがなかつた。唯一、分かつたのは、娯楽用のパソコンでネットに違法アップロードされた、アニメを見ていることぐらいだつた。

早い話、その日、彼が何時に起きたのか、何を食べたのか、何をしているのか逐一記録し、それを報告する。何とも実りの無い「作戦が」彼ら228たち監視班に与えられた任務だつた。

だが、そんな作戦も今日限りだ。上が四方を監視対象から外すことを228たちに通達してきたのだ。

228たちは素直に喜んだ。これでこのくだらない作戦から解放される。そう思うと現金なものが士気は俄然、奮い立つてくるのだつた。

228はタバコをくわえ、火をつけようとすると、隣でパソコンをいじつている部下があらか様に嫌そうな顔をした。

まったく最近の若い奴はどうしてタバコをそんなにも嫌うのだろうか。一二八は内心毒づきながら、228はタバコを箱に戻した。

そういうしていると、四方がマンションから出てきた。228は時計を見た。午前九時四五分二一秒。いつも通りの散歩の時間だ。

228はワゴンから降りると、三人の同僚もそれに続いた。ワゴンの中には一人が残つた。一人は何かあつた時、素早く外の仲間を迎えて行く運転手。

もう一人は外の仲間のメガネや胸ポケットに刺さったボールペンなどに搭載された、小型のCCDカメラから送られてきた情報を分析するスペシャリストだった。

四方は、いつも通りコンビニでパソコン関連の雑誌と弁当を購入すると、そのまま近くの公園へ向かった。そこで一服するつもりなのだろう。これもいつも通りだった。

四方は公園に設置されるベンチでタバコを吸い始めた。タバコを吸い終わると、ベンチの上でそれをもみ消した。いつもは一本だけなのに今日は四本も吸つたのだな。228はそんなことを思った。

四方がベンチから立ち上がり歩き出すと、228たちはそれを追つた。

途中、四方は立ち止るとゴミ箱に向かって、空のタバコの箱を投げた。

そのゴミ箱まではほんの数メートルだったが、それは見事に外れた。四方はそれを拾おうとせず、自室のあるマンションに向かって歩き始めた。

そして、228たちが四方のマンションの脇に停めてあるあのワゴンに乗ると、本部から連絡がきた。

「緊急の案件だ。詳細は本部で話す」

感情の起伏の少ない、機械的なその声は防諭の内事部長の声だった。

「……了解」

228がそう言つと、内事部長は電話を切つた。

それを確認すると、228は社債電話の受話器を思いつきワゴン車の床に叩きつけた。口クでもない任務を押しつけておきながら、労いの言葉も言えないのか？ クソ！

自分より一回り年下の内事部長の顔を思い出しながら、228が胸の内で毒づいていると、「国民の税金ですよ？」と部下が睨みつ

けながら受話器を電話に戻していった。

そんな光景を眺めながら、228は内事部長の言つていた「緊急の案件」がどのようなものなのか気になっていた。

とにかく何でも良い。やり応えのある仕事をさせてほしい。

そんなことを思いながら、228は防調の本部がある国防省へ向かうよう、ワゴン車の運転席に乗っている部下に命令を下した。

228たちの乗ったワゴン車は、四方の住むマンションを後にした。

先ほどの公園

その男はベンチに座り新聞を広げ、「ごく自然にベンチの端に視線を向けると、四本の吸い殻があるのを認めた。

男はしばらく新聞を読んでいたが、やがてベンチから立ち上ると、歩き始めた。

しばらく歩いた先にあるゴミ箱の前に行くと、男は新聞を丁寧に折りたたむと、そのゴミ箱の中に突っ込んだ。

その際、すぐそばに落ちていたタバコの箱を拾うとそれもゴミ箱に入れた。……この時、男がタバコの箱の中に入つていた「中身」を抜いたことを誰かが見ているはずもなかつた。

男は、そのまま近くの駅にあるトイレに行くと、その「中身」を改め、そこにビールのフィルムに包まれたJSBを認めるとき、ほくそ笑んだのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5803w/>

防人の唄

2011年10月9日03時16分発行